

良識ある保守主義・情報公開

吉田つとむ

町田市議会議員 4期連続トップ当選

<編集発行>

〒194-0011 町田市
成瀬が丘 1-14-12
サンホワイト E103-13
自宅 042-795-7361(fax 兼用)
市議会議員 吉田つとむ
yoshidaben@gmail.com



戦後80年引揚者による自立事業を引継ぐ

学校給食用の個食ジャムの販売数トップ企業

タカ食品工業株式会社は、福岡県みやま市で昭和22年12月会社設立し、今日まで続く食品製造の企業です。学校給食に使われるマーガリンの製造からスタートし、次いで果実ジャムの製造を加え、昭和29年にジャム連続製造機第1号機を完成(特許取得)し、昭和32年に液体連続真空包装を完成(特許取得)し事業を拡大したというものです。

創業者の大塚栄社長は、第二次世界大戦の敗戦(昭和20年8月)で外地(外国の中で日本が併合、あるいは支配していた地域)の生活から本土に戻らざるを得なくなった「引揚者」(630万人)の一人でした。私の親も母方の郷里に引揚てきました。大半の引揚者が柳行李(あるいはトランク)1個という姿で引揚船に乗って、舞鶴港や博多港などによりやく帰ってきたものです。そうした苦境の中でも大塚社長は「誰もやらないなら、自分たちがやる。」の精神で事業を起こし、生活に不可欠な食品加工を事業化したものです。



写真はその二代目である大塚直氏で、給食人口が減少する中、高齢者向けの給食材料や洋菓子材料のピューレなどの製造販売に取り組み、現在の需要に対応したマーケット戦略を採用し販路を拡大して現在に至っています。

タカ食品工業のジャム工場を視察見学

液体連続真空包装装置が稼働するところを視察

タカ食品工業株式会社では、ジャムはイチゴをはじめ多数の種類を作っていました。ただし、実際の作業は1種類ずつ作っているとのことでした。ジャムというと、イチゴが代表される種類ですが、タカ食品工業株式会社はその生産高が全国で最も多い福岡県と栃木県に工場を配置し、全国で販売消費される製品の材料を確保していました。



私的な旅行日程でしたが、縁があって一人だけの工場視察をさせていただきました

工場に入ってくるのは、ヘタをカットしたイチゴですべて冷凍されたものということでした。学校給食で利用されるという特殊性もあって、製品の均一性が優先されているようでした。この段階はジャム材料のチェックが必要で、ラインへの運搬を含めて、人が重要な役割を果たしていました。もちろん、窯の扱いも人がかかわっており、これは醸造業にも観られることですが、経験と勘を有した人が携わっているようでした。ジャムは、果物の原料と水あめ(国内製造)と砂糖などが使われており、それを窯で混ぜ合わせ加熱されます。その後は、左記の機械を使って個食ジャムがラインで連続して自動で製造されていきます。さらに続くラインで(1クラス相当分の)40個が1袋になって出来てきますが、最後の段ボール詰めと最終チェックは、人が担当していました。

○支持政党なしの方々の代表＝吉田つとむの基本理念は、良識ある保守主義です。

○吉田つとむは、「若者育成」をトップの政策に掲げています。

◎水耕栽培メロン 世界一決定戦を開催しよう!

町田市議会の無所属会派は、政党に所属しない議員3名で構成し、明快な議論を提起します。

若い世代の育成に全力をささげる
町田市議会議員(支持政党なしの方々の代表)

吉田つとむ



ブログ 個人HP



メールは
左記を読込
して送信



好評インターンシップは、第
55期生が終了しました。

久留米市の石橋文化センターで美術家の友情を学ぶ

石橋文化センターの全視察が久留米市に寄贈

久留米市出身の著名な画家である坂本繁二郎(1882年ー1969年)と青木繁(1882年ー1911年)は小学校の同級生でした。片方は、画家として成功した上に天寿をまっとうしましたが、青木繁は、その才能が広く認められる前に夭折しています。しかし、この二人は画家として成長していく過程において地元の中で交流が互いを磨きあっていたようでした。結果的には、青木繁の作品は散逸してしまうことになるのですが、坂本繁二郎が青木繁の作品の価値の高さを、地元久留米の石橋正二郎(ブリジストン創業者、社長)に説き、作品の収集を依頼したものです。石橋は、文化に造詣が深かったこともあって、坂本繁二郎の要請を受け、青木繁の作品収集に精を出し、立派な作品群を収集しました。なお、収集した二人の作品は石橋家の財団が東京で保有、公開されています。

石橋文化センター内の石橋正二郎記念館には、坂本繁二郎の自画像が展示されており、青木繁の作品は、「光明皇后」がそろって同じケースに収められていました。そこから、久留米市出身の坂本繁二郎と青木繁の友情がうかがえますし、ある意味、二人の人生の歩みの違いと共通性を表わしたものでした。



私用で福岡県に出向く際
に見学したものを報告

インターン体験記③-1 岡田愛海

東京ビックサイトクリエイティブデザイン展

今回のインターンシップでは、各企業が配っている広報紙ではなく、企業の色が濃く出ているブースデザインに目を向けてみることにしました。覚えているものとして、シンプルでありながらも企業カラーでブースを染め上げたものや、用意した複数の液晶モニターに制作物を流すブース、展示物が目に入りやすいよう配置や壁のデザインに工夫を凝らしたブースなどがありました。



会場では、様々のブースをめぐりました

これらは企業が立ち並ぶブースの中でも鮮明に記憶に残るものとなります。東京ビックサイトのように広い展示場では、ブースに施されたデザインや大きなキャッチフレーズ、行き交う人々の多さで視界が埋め尽くされてしまい、一つ一つを丁寧に見て回ることが難しいという印象を持ちます。

そもそも、相手は企業名すら知らない状態である可能性が非常に高く、そのような場でどうやって目を引くか……見て回る中、最も効果があるのはブース展示であると思いました。

一体これはなんだろうか、そう思わせるようなデザインを考えることも、情報(企業の概略)を伝える広告物の一つとして有効な手段なのだと感じました。デザインで言葉を表現する、ビジュアルコミュニケーションデザインが最も生かされたこのイベントにて、広告物の持つ力をより一層感じることができたと思えました。

横浜美術大学4年生 岡田愛海(第56期生)

◎吉田つとむのインターンシップは1998年に開始、2025年7月末までに112名が参加しました。

◎第55期インターン生の森田瑛斗さんは、医師国家試験に合格し、4月1日から研修医として社会人。

◎2025年夏季第56期生は1名が参加していますが、引き続き募集中です。